



Title	第二部 張家山漢簡関連文献提要
Author(s)	草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2008, 47, p. 88-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60908
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第二部 張家山漢簡関連文献提要

草野 友子

本提要は、張家山漢簡に関する主な研究書を対象として、その解説を試みたものである。

現在、張家山漢簡に関する研究論考は、学術雑誌やインターネット上に掲載された論文等も含めると、膨大な量にのぼる。従って、本稿では、張家山漢簡について書かれた専著、中でも注釈・口語訳等、基礎的研究を含む研究書を中心に紹介することとした。

掲載順は基本的に『張家山漢墓竹簡（二四七号墓）』（文物出版社、二〇〇一年十一月。以下、『張家山』と略記）に従うが、本稿の第一部同様、『脈書』と『引書』とに關しては共に医学関連書であるため、続けて掲載している。また、本稿の序言で述べられている通り、『張家山』の刊行後、釈文の修訂版が発表された。これらは張家山研究の際に必ず参照すべき文献となっているため、その紹介を末尾に掲載した。

二年律令

『張家山漢簡《二年律令》集釈』（朱紅林著、社会科学文献出版社、二〇〇五年十月、三七〇頁、横組簡体字）

『二年律令』の注釈書。『張家山』釈文を底本とし、各律令毎に詳細な注釈を施している。

まず、『張家山』に掲載されている釈文と注釈とを載せ、次に、「集釈」として著者による注釈を提示する。「集釈」部分には、関連文献の引用だけでなく、先行研究の解釈及びそれを踏まえた上での著者自身の見解を記している。ただし、竹簡の配列に関しては『張家山』釈文に従っており、特に検討はなされていない。

本書の主な特色としては、次の二点が挙げられる。

一つは、関連資料を豊富に掲載している点である。先秦・兩漢から唐宋までの律令関係の伝世文献、睡虎地秦簡・里耶秦簡・居延漢簡・敦煌漢簡等の出土文献を提示

した上で、『二年律令』との比較が行われている。特に、漢律と秦律・唐律との比較は詳細であり、これらの検討に基づいて、漢律の淵源や律令の歴史的展開にまで論及している。

もう一つは、先行研究の成果を多く取り入れている点である。張家山漢簡に関する先行研究はもとより、明清代の漢律研究の成果をも取り入れて注釈に反映させている。

附録の「有關睡虎地秦簡・張家山漢簡的研究成果」は論文・著作目録であり、『二年律令』に関するものだけでなく、『二年律令』以外の張家山漢簡の文献や睡虎地秦簡に関する論考をも含んでいる。

以上のように、本書は、『二年律令』に関連する資料や文献を多く収載しており、資料集としても有用な書である。

なお、著者は近年、この基礎的研究をもとに、さらなる考察を加えた研究書『張家山漢簡《二年律令》研究』（黒龍江人民出版社、二〇〇八年六月）を刊行している。

『江陵張家山二四七号墓出土漢律令の研究』（富谷至編、京都大学人文科学研究所研究報告、朋友書店、

二〇〇六年十月。訳注篇、三七二頁。論考篇、三三九頁。縦組和文）

『二年律令』の訳注と研究論考とを収録する総合的な研究書。「訳注篇」と「論考篇」との二冊よりなる。底本は『張家山』釈文。

「訳注篇」では、まず「緒言」において、①出土経過・「二年律令」の復元と内容・示意图・竹簡の配列、②「二年律令」という名称・二年律令の位置づけ・漢律副葬の理由、③本書の方針と研究班の構成員、以上の三項目に分けて論じている。

次に、訳注部分では、各律令毎に、「原文」「訳」「注」「解説」が施されている。本書は、原文の忠実な訳出を基本方針とする。そのため、「訳」部分では、原文にない語句は補わず、原文のみに則した日本語訳を施している。また、「注」部分では、語句解釈の根拠となる用例・典拠が掲げられており、本文読解の際に大いに参考となる。この部分では、用例・典拠を示すことに徹するため、先行研究における制度史上の解釈等は敢えて掲載していない。「解説」部分では、各条文の要点を簡潔に説明しており、その内容を容易に把握することができる。

巻末には、「秩律所見官職名表」、「秩律所見県名表」、

「二年律令」秩律所見県名表 索引、「二年律令」訳
注索引」を付す。

「論考篇」では、訳注の成果をもとにした研究論考を
三部構成で掲載している。第一部「二年律令」考証」で
は、『二年律令』の内容を検討した結果、判明した諸事実
や、そこから派生する問題を提示した論考が収められて
いる。第二部「秦漢制度考証」には、『二年律令』を中心
としつつ、他の出土漢律をも用いて考証を行った、漢代
制度史についての論考を収録する。第三部「漢律令の継
承と発展」は、漢以降から三国・六朝、さらには唐代の
律令を対象として考察を行った論考が掲載されている。

本書は、『二年律令』を研究の中心としているが、広く
秦漢から唐代に至るまでの律令を研究する上でも示唆に
富む研究書である。

なお、『二年律令』の訳注としては、他に専修大学『二
年律令』研究会による「張家山漢簡『二年律令』訳注」
があり、二〇〇三年より『専修史学』に毎号掲載中であ
る。また、『二年律令』に関する他の研究書としては、『由
張家山漢簡《二年律令》論漢初的繼承制度』（劉欣寧著、
国立台湾大学出版委員会、二〇〇七年十一月）、『秦漢刑
法研究』（水間大輔著、知泉書館、二〇〇七年十二月）、

研究論文集としては、『張家山漢簡《二年律令》研究文集』
（中国社会科学院簡帛研究中心編、広西師範大学出版社、
二〇〇七年六月）等がある。

奏讞書

『奏讞書——中国古代の裁判記録』（池田雄一編、刀
水書房、二〇〇二年十一月、二六九頁、縦組和文）

『奏讞書』に関する総合的な研究書。解題・訳注・関
係論説（翻訳含む）・付録で構成されている。底本は、『文
物』釈文（校正の段階で『張家山』が刊行されたため、
校勘記を付している）。

まず、序章「『奏讞書』解題」では、『奏讞書』とは何
か、『奏讞書』に記されている官僚制、『奏讞書』の事件
内容、案例1～16で確認できる裁判手続き、及び『張家
山』の刊行について記されている。序章の末尾には、付
論として「讞（讞）」の字の音読についての論考が掲載さ
れ、『奏讞書』（そうげんしよ）とすべきとの結論を提示
している。

第一部「江陵張家山漢簡『奏讞書』訳注稿」は、「江陵

張家山漢簡《奏讞書》積文（一）」（『文物』一九九三年第八期）に掲載された案例1～16についての訳注である。各案例毎に、「積文A」「積文B」「訳注」「補注」「口語訳」が施されている。「積文A」は『文物』積文を繁体字に改め、句読点等を削除し、簡番号を付したものである。ここには、『文物』積文・『張家山』積文の校勘記も付されている。「積文B」は訳注者が句読点等を施したものである。「訳注」では訓読と注釈とを掲げる。「口語訳」には「小見出し」が付され、裁判手続きの流れが容易に理解できるよう工夫されている。

第二部『奏讞書』関係論説・翻訳」では、まず、字義や内容を検討した研究論考が収められている。次に、中国語の報告書や論考（張家山漢墓竹簡整理小組「江陵張家山漢簡概述」、李学勤《奏讞書》解説（上）」、彭浩「談《奏讞書》中的西漢案例」を日本語に翻訳して掲載している。これによって、張家山漢簡や『奏讞書』についての基礎的情報を得ることができる。

巻末には、付録として『奏讞書』関連地図、「写真版『奏讞書』積文」、「江陵張家山漢簡関連資料・著作目録」（二〇〇一年十月まで。日文・中文に分類）、「一字索引稿」、「事項索引」が収められている。

本書は、『奏讞書』の訳注を中心とした基礎的検討を

じめ、『奏讞書』の研究論考や、張家山漢簡についての情報等も収録した総合的な研究書であり、『奏讞書』を研究する際に参照すべき一書である。

なお、編者である池田氏は近年、『中国古代の律令と社会』（汲古書院、二〇〇八年三月）という重厚な研究書を刊行した。該書には、『奏讞書』『二年律令』に関する研究論考や、張家山漢簡の積文についての情報等も掲載されている。

『張家山漢簡《奏讞書》研究』（蔡万進著、广西師範大学出版社、二〇〇六年五月、二四五頁、横組簡体字）

『奏讞書』に関する研究書。全八章で構成されている。まず、第一章「緒言」にて、『奏讞書』の出土・整理とその発表、研究の回顧、及び本書の主要目的について述べる。第二章では、『張家山』積文中の二十七箇所に対して著者による補釈が施されている。続く第三章は、『奏讞書』という名称と本文献の構成とについて再検討を行っている。第四章では、『奏讞書』の材料の来源と編纂・改訂が行われた年代とについて考察する。

以上の基礎的検討の後、個々の検討が行われる。第五

章では、『奏讞書』中の法律は、高祖七年の讞疑獄詔の法律化と、奏讞案例の判例化の基礎の上にあると分析する。第六章では、『奏讞書』に反映されている秦漢法律の実際の施行状況について言及する。さらに、第七章では、『奏讞書』を通して、当時の楚漢関係に対する認識、秦における新地開拓と郡の設置、及び漢初の中央政府と諸侯との関係について検討している。最後の第八章では、先行研究を概括した後、奏讞の時間、奏讞の機構及びその官員、他の奏讞文書との比較、奏讞文書の伝達、決讞という五つの方面から漢代の奏讞制度の執行について考察している。

巻末には、「主要参考文献」、「《奏讞書》研究論著簡目」、「《奏讞書》校文」、「《奏讞書》竹簡図版」を付す。

以上のように、本書は『奏讞書』を様々な角度から検討した研究書であり、『奏讞書』研究を行う際に参考となる一書であろう。

なお、『奏讞書』の訳注としては、他に学習院大学漢簡研究会による「江陵張家山漢簡『奏讞書』を読む」というシリーズがあり、二〇〇〇年から『学習院史学』や『中国出土資料研究』上に掲載されている。また、『二年律令』と『奏讞書』の両文献にわたる研究書としては、『張家山

漢律研究』（曹旅寧著、中華書局、二〇〇五年八月）、『張家山漢簡法律思想研究』（曾加著、商務印書館、二〇〇八年二月）等がある。

脈書

『張家山漢簡《脈書》校釈』（高大倫撰、成都出版社、一九九二年六月、一一六頁、横組繁体字）

『脈書』の注釈書。『張家山』釈文が刊行される以前の研究書であり、『文物』釈文を底本としている。

本書は、『脈書』を「脈書・一」、「脈書・二」、「脈書・三」の三部に分けている。

「脈書・一」は、「原文」と「註釈」のみで構成される。

この箇所に記載される古代の病名は難解であり、句式も特殊で、原文の術語変化も比較的少ないことから、現代中国語訳は記載されていない。

「脈書・二」「脈書・三」は、「原文」「校文」「註釈」

「訳文」（現代中国語訳）で構成されている。「校文」部分では、『脈書』と多くの重複部分を持つ馬王堆帛書『陰陽十一脈灸経』『脈法』『陰陽脈死候』や、『靈枢』経脈

篇等の関連する文献との対校が行われており、文字の異同が容易に確認できる。

巻末には、『脈書』病症索引」が付されており、病名・病症から該当箇所が検索できるようになっている。

本書において注目すべきは、後に刊行された『張家山』積文よりも詳細な注が施されている点である。「註釈」部分には文字学や医学関係資料を中心に、多くの関連文献を引用して病名・病症の解説が行われており、参考にすべき箇所が少なくない。ただし、『張家山』積文において新たに文字の判読が可能となった部分もあるため、研究の際には、本書とあわせて『張家山』積文も参照する必要がある。

なお、『脈書』に関わる書として、『馬王堆漢墓帛書』肆、『張家山漢墓竹簡』所收十一経脈积文 総索引（小林健二著、大東文化大学研究所、二〇〇四年）がある。該書は、馬王堆帛書『足臂十一脈灸経』同『陰陽十一脈灸経』甲本・乙本、張家山漢簡『脈書』（第二部分）についての一字索引であるが、それぞれの積文をも掲載している。さらに、張家山漢簡『脈書』第二部分と内容の重複が見られる『陰陽十一脈灸経』甲本・乙本、及び『靈枢』経脈篇の四文献を対照させており、文字の異同を相

互に比較する際、非常に便利である。

引書

『張家山漢簡《引書》研究』（高大倫著、巴蜀書社、一九九五年五月、二〇六頁、横組簡体字）

『引書』に関する研究書。研究篇と注釈篇との二部よりなる。『張家山』積文が刊行される以前の研究書であり、『文物』積文を底本としている。

研究篇には、テーマ別の小論文が掲載されている。その内容は、①引言、②墓主の身分と『引書』の下葬年代、③『引書』の主要内容、④『引書』中の導引の術式、⑤『引書』から見た導引の源流、⑥倣生導引（動物の姿勢や動作を真似る導引）の起源とその変化・発展、⑦『引書』と馬王堆帛書『導引図』との比較、⑧『引書』と『脈書』の関係、⑨『引書』から見た導引と道家との関係、⑩『引書』と『黄帝内径』『養生方導引図』との関係、⑪導引と戦国秦漢の社会と文化、⑫『引書』の成書年代、以上の十二篇である。特に⑦⑩については、関連部分の対照表が付されており、各文献との対応関係を容易に確

認することができる。

注釈篇には、「原文」「注釈」「訳文」及び「文献別録」(関連文献の引用)が掲載されている。「注釈」部分には、後に刊行された『張家山』釈文よりも詳細な注が施されている。

卷末には、「《引書》中導引術式名称」、「《引書》中導引所治病症」、「馬王堆三号墓出土《導引図》原図・復原図及《導引図》題記釈文」、「江陵張家山漢簡《脈書》釈文」、「《引書》主要詞語索引」が付され、特に馬王堆帛書の関連資料と比較する際に有用である。

本書は、訳注と共に、『引書』の内容を多方面から検討した総合的な研究書である。また、図表を多用して、『脈書』と他の文献との関連部分を明確にしていることも本書の特徴の一つである。

なお、日本における『脈書』『引書』の研究書としては、『新出土資料による中国古代医学の研究—張家山出土漢簡を中心に—』(研究代表者・坂出祥伸、平成六年度科学研究費補助金 一般研究(B) 研究成果報告書、関西大学文学部、一九九五年)があり、該書には『脈書』『引書』に関連する研究論考三篇が収録されている。

算数書

『張家山漢簡《算数書》註釈』(彭浩著、科学出版社、二〇〇一年七月、一三四頁、横組繁体字)

『算数書』に関する初の注釈書。張家山漢簡の発掘・整理等に携った彭浩氏の著作である。この後に刊行された『張家山』所収の『算数書』釈文も、彭浩氏が担当している。

まず「緒論」では、①竹簡の配列と書写法式、②成書年代及びそれに関連する問題、③主要内容、④『算数書』から『九章算術』に至るまでの過程、⑤抄本としての評価、以上の五つのテーマに関する小論文が掲載されている。

「註釈」においては、『算数書』の六十九の算題全てに詳細な注釈を施している。文字に対する注釈の他、計算式や図示を多用して各計算の解説を行っており、『算数書』の内容を理解するのに有益な資料を提供している。また、誤写・衍字・脱文があると考えられる箇所には原文に対して訂正を施し、その根拠を注釈中で説明する。さらに、計算の錯誤がある場合も注釈にて指摘している。

巻末には、「算数書」竹簡整理号与出土号対照表」、「主要参考文献」、「張家山《算数書》竹簡出土側視図」、及び竹簡の写真図版（白黒写真と一部カラー写真）が付されている。

本書は、『張家山』刊行以前のものであるが、その注釈は『張家山』釈文のものよりも詳細である。また、具体的な計算方式や図示等も載せており、『算数書』の読解を進める上で、大いに参考となる一書である。

『漢簡『算数書』——中国最古の数学書』（張家山漢簡『算数書』研究会編、朋友書店、二〇〇六年十月、一七二頁。別冊、二四頁。横組和文）

張家山漢簡『算数書』研究会（代表・大川俊隆）による研究書。数学、簡牘学、古文字学、古代史学等、多分野の専門家による共同研究の成果である。別冊には、『張家山』よりも鮮明な竹簡の写真図版が収録されている。

まず、「序文」において、『算数書』研究会発足の経緯や、研究方法等について述べられている。

次に、訳注部分では、各算題毎に「釈文」「訓読」「日本語訳」「中国語訳」「注」を施している。「釈文」部分

には、別冊所収の写真図版に基づいた釈文が掲載されている。彭浩氏前掲書では原文の文字に対して訂正を施していたが、一方、本書では明確な証拠がある場合を除き、基本的に文字の変更は行わない方針をとっている。「注釈」部分には、計算式や図示、難解箇所の考察等が随所に記されており、これによって内容をより深く理解することができる。

六十九の算題の配列については、彭浩氏の説には従わず、「竹簡出土位置示意图」に基づいて配列した劉金華氏の説（「試説張家山漢簡《算数書》的文本結構問題」、簡帛研究網站、二〇〇三年十二月八日）に従っている。

巻末には、『算数書』中の主要数学用語、「参考文献」、「主要用語索引」を付す。

別冊所収の写真図版は、荊門市博物館や文物出版社の承諾を経て、『張家山』収録のものよりも鮮明な写真図版を掲載している。この写真図版に基づいて、再度文字の釈読が行われていることも本書の特徴である。また、各竹簡写真の横には、研究会が確定した釈文が挿入されており、写真と文字とを容易に対照することができる。

このように、本書はより正確な訳注を読者に提供しており、『算数書』研究はもちろん、中国数学史研究においても非常に有益な書である。また、訳注には日本語訳だ

けでなく、中国語訳をも掲載し、広く中国学に携わる研究者が利用できるように配慮されている。

なお、本書の研究成果を基にした論文集として、『張家山漢簡《算数書》の総合的研究』（産研叢書二十六、大阪産業大学産業研究所、二〇〇七年二月）がある。

蓋廬

『伍子胥兵法破解』（陳宇著、軍事科学出版社、二〇〇三年八月、三〇六頁、横組簡体字）

『蓋廬』に関する初の専著。『蓋廬』（全九章）の章ごとに原文・口語訳・語釈を施している。さらに「專題解論」と題して、テーマ別の小論文（各章三〜八テーマ程度）を掲載する。

巻頭には、竹簡の写真図版や示意图等が掲載されている。巻末には、呉越抗争を略記した「付録一：轟轟烈烈的呉越戦争」、及び『史記』『越絶書』に見える伍子胥の関連記事を載せた「付録二：《史記》中的伍子胥生平」、
「付録三：《越絶書》中的伍子胥生平」が付されており、

伍子胥の業績を通覧する際に便利である。

『蓋廬』の分析を中心とするものの、その書名が示すように、伍子胥の兵法に焦点を当てた研究となっている。

『史記』『呉越春秋』『越絶書』等の史書に見える伍子胥の事績やその時代背景をも考慮に入れ、伍子胥の用兵法を総合的に論じており、とりわけ本書と『孫子』との関連性を指摘する点に特徴がある。

ただし、本書は『張家山』刊行後、間もない研究であるため、当然のことながら他の研究成果は反映されていない。

『張家山漢簡《蓋廬》研究』（邵鴻著、文物出版社、二〇〇七年十一月、八六頁、横組繁体字）

『蓋廬』の注釈書。第一章「《蓋廬》研究」、第二章「《蓋廬》釈文」、第三章「《蓋廬》註釈」の三章で構成されている。

第一章「《蓋廬》研究」は、『蓋廬』と『漢書』芸文志所収の二種の「伍子胥」書との関係、本書の成書時期とその作者、本書の思想内容について、それぞれ考察を行

っている。(なお、本部分は、二〇〇二年に発表された著者による論文「張家山漢墓古竹書『蓋廬』与『伍子胥兵法』」(『南昌大学学报』「人社版」第三十三卷第二期)を基に、その後の研究成果も取り入れて加筆訂正したものである。)

第二章「《蓋廬》 釈文」は竹簡の配列通りに釈文を掲載したもので、墨点(●)、重文記号(三)、墨鉤(┐)もそのまま記載されている。

第三章「《蓋廬》 註釈」は、原文・注釈・口語訳よりなる。この章が本書の中心であり、著者自身の解釈はもとより、先行研究におけるこれまでの解釈をも簡単に参照できる点で有用である。

巻末には、『蓋廬』に関する主要論考の一覧や、竹簡の写真図版が付されている。

本書は、『蓋廬』に関する基礎的研究がなされており、特にその注釈部分に関しては、諸家の意見を広く集めて吟味している点に特徴がある。

釈文修訂版・補訂版

『張家山漢墓竹簡(二四七号墓)』(釈文修訂本)』

(張家山二四七号墓竹簡整理小組編著、文物出版社、二〇〇六年五月、二二九頁、横組繁体字)

『張家山』釈文の修訂版。『張家山』釈文において判読不能であった文字等に対して、修訂を行っている。ただし、修訂箇所については、注釈中に明示されていない。また、本書には竹簡の写真図版が収録されていないため、文字の照合等を行う際には『張家山』で確認しなければならない。

本書は、『張家山』釈文と同じく、釈文と注釈とで構成されている。竹簡の配列に関しては、『算数書』や『二年律令』を中心に多くの意見があるものの、まだ共通認識には至っておらず、また『張家山』所収の写真図版と対照させることをも考慮して、配列の変更や竹簡番号の変更は行っていない。

末尾には、『二年律令』に関する論考三篇が掲載されている。釈文の修訂はこれらの論文に依拠している箇所もあるため、あわせて参照する必要がある。

テキストとして本書を使用する際には、以上の点に留意されたい。

『二年律令与奏讞書——張家山二四七号漢墓出土法律文獻釈読』（彭浩・陳偉・王藤元男主編、上海古籍出版社、二〇〇七年八月、四〇五頁、縦組繁体字）

『二年律令』『奏讞書』の竹簡を、赤外線技術を用いて再度判読し、写真図版と共に掲載した書。

本書は、『張家山』釈文において判読不能であった箇所に対し、赤外線カメラを使用して再度判読を行うと共に、部分的に文字の修訂を行っている。さらに、『二年律令』については、『張家山』には未収録であった残簡十四枚を「新見竹簡与残片」として収録している。

注釈部分には、『張家山』釈文の注釈と共に、既発表の研究論考の成果をも踏まえた注釈が施されており、非常

に詳細なものとなっている。

各竹簡の番号は『張家山』釈文と対応しているが、『二年律令』に関しては竹簡の配列を変更している箇所があるため、注意を要する。また、残簡を新たに綴合している部分もあり、その場合は注釈の中で説明を加えている。

本書は、武漢大学簡帛研究中心・荊州博物館・早稲田大学長江流域文化研究所による日中共同研究の成果であり、今後、『二年律令』『奏讞書』を研究する際に、必携の書となる。

〔付記〕

本稿は、平成二十年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。